

ドナウ の 四季

2014年・秋季号・No.24

追悼の夏	盛田 常夫	1
追悼:佐藤経明教授(横浜市立大学名誉教授)	盛田 常夫	2
ご会葬者へのご挨拶	大石 亜希子	4
原発輸出問題について考慮するべき論点	船橋 晴俊	5
懐かしの善通寺	チェレシネーシ アンナ	6
キッチンのお姫様になるまで	トート・ティーメア	7
留学生自己紹介	須田 瑞穂・中原 麻衣子	8
幼児サークルの紹介	ポジョニ 美奈	10
保護者から見た子どもの変化	丹野 かおり	10
運動会で得たこと	山岸 春陽	11
団長として	野村 直希	11
最高のプレゼント	畑山 建吾	12
2014年4カ国対抗親善ゴルフ大会	町野 憲善	13
多分、僕だ!	藤田 洋一	14
何とか面目を保った	橋本 恭行	14
私のゴルフ道	高垣 信元	15
スポーツ・サークル情報		16

追悼の夏

盛田 常夫

師は「がんという物体」を除去したり攻撃したりすることを主要な目標とし、それぞれの患者がかかえる個人の生き方や「生活の質」を二の次にしていると思えない。手術や抗がん剤治療の副作用で患者が死亡しても、それは「がんのために死亡」とされる。現代医療は目標と手段を取り違え、けっして自らの過ちを認めようとしぬ。その意味で、現代のがん治療はいまだ、非常に初歩的な段階にある。患者はそれを良く知って、医師に自らの命を百パーセント預けることなく、治療や残された人生についての明確な意思を持つことが必要だ。

船橋晴俊君は私より1歳年下で、東大文学部大学院の出身の社会学者である。彼が法政大学に奉職した1979年には、私はハンガリー留学中で、1980年に大学へ戻って初めて顔を合わせた。私は1981年から2年にわたって、学部長補佐(学生自治会担当責任者)を務め社会学部のキャンパス移転の決定を担った。船橋君が学生委員として私を支えてくれた。私が法政へ赴任した1975年の法政大学飯田橋キャンパスは、大学紛争時代の遺物を抱え、荒廃状態にあった。大学紛争を経験したわれわれ団塊世代が、荒れ果てたキャンパスを建て直す仕事を請け負った。懸案だった町田キャンパスへの移転決定を行い、1984年に経済学部と社会学部の第一次移転が実現した。法政大学百年の歴史の中で、新たな発展の時代を迎える画期を記した。

分野が異なるので専門的な事柄で議論することはなかったが、すべてのことに誠実に対応し、手を抜かない船橋君は、誰からも好かれた。「民意と政策の矛盾」という視点は彼の生涯を通したテーマで、新幹線公害の研究から始まり、今日の原発問題に至るまで、社会調査に専念していた。寝食を忘れて仕事に没頭したことが、突然の死を招いたと思う。なんとも残念なことである。船橋君がこの春の参議院で行った陳述を本誌に掲載して、彼の遺志を伝えたい。

(もりた・つねお

「ドナウの四季」編集長)

器の開発者であるサース・アンドラーシュも、客員教授として年2回の集中講義を担当している。

ロシュカ夫人はリスト音楽院の英才教育課程のピアノ教授で、アメリカ訪問の度に、各地でコンサートを開いていた。息子の一人がスイスの医療研究所の研究者で、膵臓癌発見からスイスとハンガリーの両国で、医師の共同作業を担った。ただ、主たる治療は各種抗がん剤の投与で、例に漏れず、治療によってロシュカ教授の体は急速に衰弱していった。

抗がん剤治療を終えて、体力は一時的に回復したが長続きしなかった。抗がん剤治療を始めて、およそ7ヶ月で他界された。ロシュカ教授はサース教授の集中講義に参加され、熱心に講義を聴いていられたが、温熱治療を受けることはなかった。ご子息が治療態勢に全責任をもち、抗がん剤治療を選択したからである。温熱治療や緩和治療をおこなってれば、これほど早く亡くなることはなく、生活の質を維持したまま、残された仕事の整理を行う時間が取れたらと思う。しかし、医療にたいする考え方はそれぞれが責任をもつ以外になり。ご子息は最初から7ヶ月ほどの命だと考えられたようだが、それならもっと仕事ができるような治療を選択すべきではなかったかと思う。

もう一人の子息は牧師として、聖イシュトヴァーン教会でのミサを取り仕切った。500名を超える知人や教え子たちが、ロシュカ教授の早すぎる他界を惜しみ祈りを捧げた。享年74歳であった。

佐藤経明先生の追悼は別途記したが、先生は現代医療にたいして万全の信頼をもっておられた。それは結核治療から再興した若き日の体験からきている。確かに現代医学は多くの難病を克服してきた。それによって、人々の寿命もまた飛躍的に伸びた。他方で、がん治療にたいする現代医学は、いまだ混沌の時代にあり、外科手術や抗がん剤治療が幅を利かせている。しかし、外科手術や抗がん剤治療の副作用は、無視できないほど大きい。多くの医

巻頭エッセイ

温熱治療のパラダイムを転換する

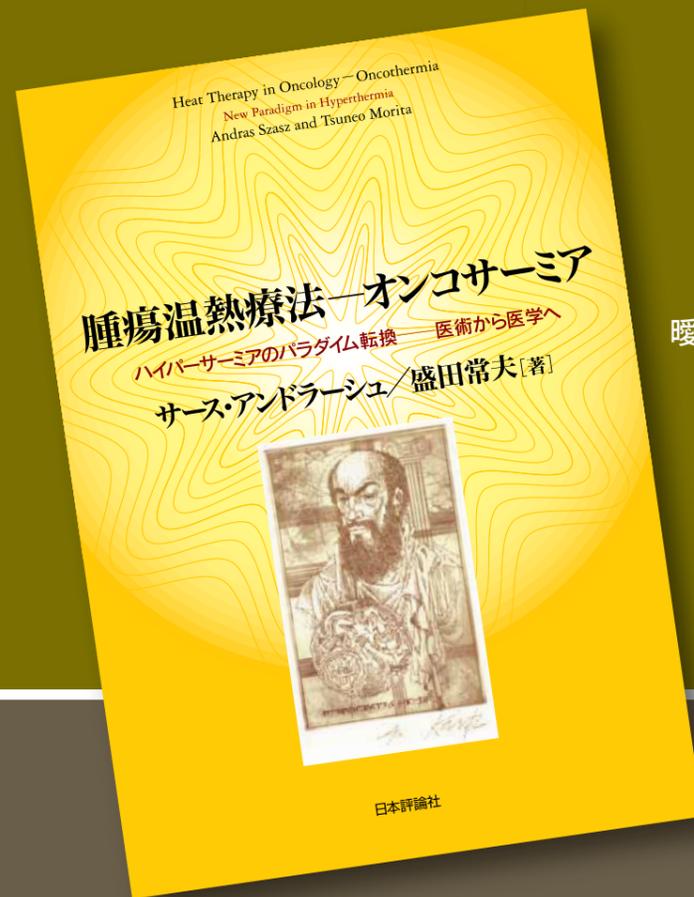
温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。

曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

- 第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価
 - 1.1 ハイパーサーミアとは何か
 - 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
 - 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
 - 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア
- 第2章 ハイパーサーミアの物理学
 - 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
 - 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
 - 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存 (NTD) 効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム
- 第3章 ハイパーサーミアの生理学
 - 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
 - 3.2 生体における温度制御
 - 3.3 生体の加熱と体温
 - 3.4 加熱による温度の分布
 - 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
 - 3.6 加熱と冷却: リスクとその回避
 - 3.7 温度測定と熱積算量 (ドーズ)



- 第4章 腫瘍温熱療法
 - 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
 - 4.2 ハイパーサーミアの手法
 - 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
 - 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場 (コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
 - 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題
- 第5章 オンコサーミアの理論と方法
 - 5.1 電場の利用
 - 5.2 細胞燃焼
 - 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
 - 5.4 ミクロスコピック加熱
 - 5.5 集束化の原理
 - 5.6 温度の役割
 - 5.7 安全性
 - 5.8 積算量 (ドーズ)
 - 5.9 臨床事例
- 第6章 自然療法としてのオンコサーミア
 - 6.1 ホメオスタシスの復位
 - 6.2 細胞の自然死の促進
 - 6.3 細胞転移の阻止
 - 6.4 転移がん細胞に作用

追悼：佐藤経明教授（横浜市立大学名誉教授）

盛田 常夫

佐藤経明先生がお亡くなりになった。享年89歳であった。

佐藤先生は東大経済学部を卒業され、都立商科短期大学を経て、1970年からは横浜市立大学に勤務され、以後1988年に定年退職されるまで奉職された。その後は日大経済学部で教鞭をとられ、1995年に日大も定年退職された。

社会主義研究分野における佐藤先生の存在は非常にユニークなもので、東大講座派の教えを受けたにもかかわらず、思考はきわめて柔軟で、西欧の社会民主主義者に近いものをもっておられた。先生の分析は既成の理論から出発するのではなく、ソ連・東欧を実際に訪問した経験に裏付けられた直観に近い感覚にもとづいていた。西欧の社会主義研究家の知己が多く、日本では珍しい西欧とソ連・東欧の双方の実情や研究に詳しい研究者であり社会観察者であった。

冷戦終焉まで、日本の社会主義研究は理論やイデオロギー偏重の時代が長く続き、現実から出発して分析する研究姿勢が欠如していた。とくに、東大講座派が事実上消滅した後の社会主義研究は、関東の一橋大学経済研究所を中心としたグループと関西の京都大学を中心としたグループに二分されてきた。講座派亡き後の社会主義研究の理論的「正統派」は関西に移り、関東の一橋大学ではイデオロギーにとらわれない社会主義研究が盛んになっていった。

こうした東西の狭間であって、佐藤先生は一橋大学の野々村一雄、宮鍋幟、岡稔等のソ連研究者たちと交流を深められた。とくに岡稔教授とは同年代ということもあり、その真摯なソ連研究に非常に期待されていた。岡教授は1960年代のソ連の論争を精緻に追跡され、ソ連における商品生産の可能性について熟考されていた。しかし、1973年に肺がんが発見され、間もなく49歳の若さで他界された。佐藤先生のみならず、多くの研究者が岡教授の夭折を惜

しんだ。当時、私は大学院生だったが、岡先生の著作を知らずにいた。しかし、岡教授を失った損失の大きさは、恩師関恒義の落胆した様子から十分に伺い知ることができた。佐藤先生も事あるごとに、岡先生の逝去を惜しまれていた。

こういう経緯から、佐藤先生は引き続き、一橋大学出身の若い研究者たちとの繋がりを大切にされていた。私が初めて佐藤先生と懇意にさせていただいたのは、ハンガリー留学から戻ってすぐに翻訳出版したチコシュ・ナジ・ペーラ『社会主義と市場』（大月書店、1981年）の書評を依頼したことがきっかけである。佐藤先生は著者のチコシュ・ナジ（当時、ハンガリー価格庁長官）と知己だったこともあり、『週刊エコノミスト』誌の書評で取り上げていただいた。

こうした縁もあって、1983年1月に法政大学社会学部創設35周年記念講演会にハンガリー人経済学者コルナイ・ヤーノシュを招いた折、佐藤先生に討論者の一人になっていただいた。当時、記念講演会、「不足の経済学」をめぐる討論会（コルナイの友人である宇沢弘文氏が議長）、「ハンガリー・セミナー」の三つの行事を組織したが、佐藤先生はその三つの行事すべてに参加された。

1986年から87年にかけて、統計研究会の篠原三代平先生と竹内啓先生が主宰された「社会主義経済の改革」をテーマにされた研究会に、私は佐藤先生とともにお招きをいただき、何度もディスカッションする機会が与えられた。

その後、1988年に私が駐ハンガリー日本大使館の専門調査員として赴任した折、やはりハンガリー新政府の経済政策を支援する国際委員会（ブルーリボンコミッション）東京会議（1990年、野村総研共催）に、討論者としてご参加いただいた。

私は専門調査員を終えて大学へ戻ったが、数か月で大学を辞して、1991年春に野村総研の顧問として再びハンガリーへ赴任した。そこからはメールを通して、ハンガリ

ーやその周辺国の情報を佐藤先生に送った。民間研究所での私のポストの行く末を心配され、日大を退職される際に、日本に戻らないかと、気にかけていただいた。

2006年にコルナイ・ヤーノシュ『コルナイ・ヤーノシュ自伝』を発刊したが、翻訳原稿を逐次佐藤先生に送り、目を通していただいた。1960年代からハンガリーを知っている先生には、コルナイの詳細な戦後ハンガリーの記述は若き日の思い出を蘇えさせるものになった。翻訳本が刷り上がり、赤坂のレストランで、佐藤先生や久保庭真彰君（一橋大学名誉教授）等と編集者を交えて、小さなお祝いの会を開いた。その写真が手許にある。

2006年はちょうどハンガリー動乱50年にあたる。この頃、私はハンガリー社会主義成立直後にラーコシ書記長とともに四人組の一人と呼ばれていたファルカシュ・ミハーイの息子ヴラジミールが、体制転換直後におこなった長時間の口述記録が存在するのを知った。ヴラジミールは戦後の公安警察成立時から、盗聴技術としてすべての重要なでっち上げ事件の現場に居合わしている。その口述内容をテーマ毎に解説して、逐次、佐藤先生に送った。社会主義成立からハンガリー動乱にいたる秘密警察の活動が詳細に描かれた貴重な資料である。ライク・ラスロー外相の逮捕・処刑からハンガリー動乱にいたる過程は驚くべき内容に満ちており、ハンガリーにおけるラーコシ独裁確立過程の狂気を肌で感じるができる資料である。その内容の一部は、拙著『ポスト社会主義の政治経済学』（日本評論社、2010年）に記した。戦後の社会主義成立の歴史分析を塗り替えるほどの衝撃をもつ資料である。

ハンガリー動乱当時、学生時代を過ごした研究者にとって、社会主義を信奉するとしないにかかわらず、動乱勃発は衝撃的な出来事であった。当時の進歩的知識人たちはこれを「反革命」として、ソ連の主張に同調することしかできなかった。何故にハン

ガリー動乱が勃発したか、日本の研究者にはそれを分析する力も環境もなかった。ヴラジミールの口頭記述から、ハンガリーにおけるスターリン型権力の確立とそれに伴う暴力的なでっち上げ事件の真実が明々白々になった。こうやって、歴史の謎が一つずつ解明されていく。

ライク逮捕に果たしたカーダールの役割や、動乱の最中、ソ連共産党がカーダールを新しい書記長に任命したプロセスも明らかになった。ソ連軍に連行されてブダペストの軍事飛行場からモスクワに連れられ、翌日にはクレムリンの政治局会議に立つことになったカーダールが、次第にフルシチョフの理解を得て、独自性を発揮していく過程も明らかになった。佐藤先生がハンガリーを最初に訪問したのは、カーダール時代が本格的に始まった時期である。カーダールへの佐藤先生の評価は高く、ハンガリーには他に選択肢がなかったという確信は変わらなかった。

佐藤先生は市場をベースにした西欧の社会民主主義が持続可能なモデルを考えていらっやっと思ったと思う。その意味で、市場を否定したソ連型の社会主義の崩壊に驚くべきものはなかった。しかし、その社会的大変動にたいして、現代の若い研究者がそのダイナミズムを分析するのではなく、たんと論文のテーマになりそうな瑣末事象を追いかけて、論文製造に勤しんでいる昨今の学会状況に落胆しておられた。「いかなる心象をもってそのテーマを追いかけているのか、不思議でならない」という嘆息を何度も聞いた。これは何も比較経済体制学会だけの問題ではないと思うが、現代の学問研究が陥りやすい陥穽である。

親子ほどの歳の差があり、かつ師弟関係にない私たちは、研究以外の場で交流する機会は少なかったが、1990年代から今まで、日常的にメールで情報交換した。それは共通するクラシック音楽でも同じであった。佐藤先生は実にクラシック音楽に詳しく、一流の音楽家の演奏会は逃さないほどの熱狂的なファンだった。無名の音楽家のコンサートを紹介した時などは、「もうそれ

ほど長く生きられないのだから、二流三流の価値のものに無駄に時間を使いたくない」と鑑賞を断られたことがあった。それでも、若手のピアニスト金子三勇士君を交えて昼食をとり、佐藤先生だけでなく、同じくクラシックファンの倉林義正先生に、三勇士君を紹介したことがあった。

旧制高校時代から大学の結核療養時代を通して、佐藤先生は語学を勉強され、ドイツ語、英語、ロシア語に堪能だった。さすがに旧制高校の教育は違うと思ったものだ。とくに、文法がしっかりしており、英文論文を書くことに苦労されなかった。ただし、発音はお世辞にも良いとは言えなかったが、研究者とはしっかりとコミュニケーションされていた。こういう知識人はもう日本では教育されないのだろうか。

佐藤先生から胃がんの手術をすると聞かされたのは、2012年の出版記念会でお会いした時だ。私がハンガリー人研究者と出版した『腫瘍温熱療法：オンコサーミア』



フルシチョフの墓前で

（2012年、日本評論社）の出版記念会が東京のハンガリー大使館で開かれた折、佐藤先生にもご参加いただいた。このときは、いつものように冗談を飛ばされ、用意された食事を堪能されていた。しかし、その時にはすでに、胃の全摘手術の日程が組まれていたようだ。

佐藤先生の古い友人たちからは、手術や民間療法にたいする種々の「忠告」や助言が寄せられたようで、一々返事していただけないとこぼされていた。私は「87歳の年齢で、胃を全摘する意味がありますか。温熱療法などで経過を見たらどうですか」と

申し上げたが、すでに堅く決心されていた。私が今推進している温熱療法を受けられる病院が日本になかったこともあって、強く意見することは差し控えた。全摘手術の後に抗がん剤治療を受けるというメールがあった時も、「その歳で癌細胞が急増することはないのだから、何も生活の質を落とす治療を受ける必要はないのでは」と申し上げたが、「いや、私の癌細胞はもしかして、非常に若くて元気が良いかもしれないので」とおっしゃった。「200歳まで生きようとするならまだしも、5年10年しかない命を苦しめる必要があるのだろうか」と思ったが、それは言えなかった。

術後、渋谷でお昼を一緒にしたが、もちろん先生は固形物を食べることができず、注文されたスープにほとんど手を付けられなかった。先生の体は胃の全摘手術から2年しかもたなかった。もし手術を回避して何もせず、好きなものを食べ、生活の質を維持できれば、もう少し長い時間生きることができたのではないと思うが、これは結果論。本人が納得されて受けた手術だから、他人が口出しできることではない。

先日、比較経済体制学会から佐藤先生死去の訃報が伝えられた。そこには、「胃がんのため死去」とあった。しかし、すでにがんは除去されているのだから、この記述はおかしいと思う。正確には、「胃全摘手術の後、次第に体調を崩し、生命を維持することができなくなった」というのが正しい。ただし、現代の医学はこのように記述することを排除している。手術は常に適切で、その後の副作用はすべて原発の腫瘍が原因という立場をとっている。医療は個人個人の年齢や余生の在り方に即した治療でなければならず、たんに「がん」という異物を処理するものでないはずだ。89歳まで生きることができれば死亡原因など二の次だが、何のための手術だったのか、私はこの疑念を拭うことはできない。

いずれ天国で、佐藤先生から手術の総括をお聞きしたいものだ。「手術以外の選択肢はなかった」とおっしゃるかもしれないが。

2014年8月 盛田 常夫

ご会葬者へのご挨拶

ご参列の皆さま、本日は大変ありがとうございました。佐藤経明の長女、大石亜希子と申します。ここでは私から、病気の経過とこの葬儀のスタイルに至った経緯について、ご説明申し上げます。

病気の経過

本日ご出席の皆様には、父がお送りした「闘わない闘病記」や「病状報告」で詳細を御存知の方が多と思われるので、簡単に病気の経過を振り返ることに致します。父は1925年(大正14年)4月23日、朝鮮半島・平壤にて5人きょうだいの二男として生まれました。胃がんが発見されたのは86歳だった2011年11月のことで、当時の主治医は父の病状から、手術には適さないケースであり、余命半年～1年と診断していたようです。しかし抗がん剤治療が奏功してリンパ節転移の縮小がみられたため、2012年6月に胃全摘手術を受け、その秋から抗癌剤治療を再開しました。その後、QOL(quality of life)を考えて2013年10月に抗癌剤治療を自主的に中止しております。今年の春からだんだんと疼痛が頻繁になり、2014年6月27日に消化管狭窄による激しい嘔吐で虎の門病院分院に緊急入院いたしました。入院後、一時は流動食が食べられるようにもなりましたが、やがて狭窄の悪化から食事はとれなくなり、ほぼ1か月間、点滴のみで過ごした後、8月3日に容体が急速に悪化し、8月4日(月)午後11時32分に最後の呼吸。医師の到着を待つ間に翌日になり、2014年8月5日(火)午前1時32分死亡確認となりました。直接死因は「胃ガン」、初診から2年10か月、手術からは2年2か月弱生きて、89歳3か月の人生でした。

入院中も新聞は欠かさず読み、気になる記事の切り抜きで枕の周りは散らかりっぱなしでした。昏睡状態に陥ったのは日曜日の深夜でしたが、その朝まで自力歩行でトイレに行っておりました。夜には体力が落ちて会話はできなくなりましたが、昏睡する2時間前まで学者仲間からのメールを読み、母の呼びかけ声を聞きながら徐々に意識を失いました。そして24時間昏睡した後、孫(=私の息子)と私に手を握られな

がら息を引き取りました。

葬儀について

本日の告別式は、私が父から渡された「覚書」に沿ったものとなっております。父は胃癌になるはるか前、2000年の時点で葬儀については明確なイメージをもって私に指示しておりました。ただ、友人が次々と先立っていかれたのは父にとって大きな誤算でした。「覚書」を書いた当初は、友人の唄う第六高等学校の寮歌で送られることを希望しておりまして、それを耳にした辻義昌さんが「その頃には誰も残ってなくて六高寮歌は多分、不可能でしょう」と、憎まれ口も励ましと見つからないことをおっしゃったそうですが、その通りになってしまいました。昨年秋には親しい友人である堤清二さんも亡くなりました。そのため父のプランは修正を余儀なくされ、本日は毛里先生と栖原先生にお話をお願いした次第です。

本日流れております音楽は、父が最期に聴いていたクラシックの弦楽六重奏、そしてジェーン・バーキンです。ところどころ、セクシーすぎるため息が聞こえたかもしれませんが、このバーキンは父の指示によるものです。セルジュ・ゲインズブルの死後、喪に服していたバーキンが再活動を始めた1996年には、わざわざ海外出張の予定を変更してパリのオランピア劇場に駆け付けたほどのファンでした。

ところで、父の人生で最も大きな打撃だったのは、最初の子ども、私の兄に当たる高彰を病気のため、わずか3歳で亡くしたことです。後ほど棺の中に兄の写真が入っているのをご覧になるとと思いますが、おそらく父は一日たりとも兄のことを忘れたことはなかったと思います。父が長く生きることにこだわったのも、兄のことを覚えている自分が生きている限り、その子は本当に死んだことにはならないと考えていたからだと思います。闘病中の父のモットーは、「息をしている限り私は希望を失わない(Dum Spiro, Spero)」,そして「Man is immortal」でした。

もうひとつ、棺の中の父の顔をご覧いただきますと、鼻の頭が赤くなっているのに

大石 亜希子

お気づきになると思います。これは2年前の手術当時から父に優しくしてくださっていた美しい看護師さんが、「佐藤さん、酸素マスクが当たって痛いでしょう」と鼻にパッドを貼ってくれまして、その痕跡が残っているのです。貼ってもらったときにはもうほとんど話せなくなっていました。父は、それはそれは嬉しそうな顔をして、感謝をこめて看護師さんを見上げておりました。葬儀屋さんからは、「ファウンデーションを塗って隠したらどうですか」と言われたのですが、ご愛嬌と思ってそのままにしてあります。

皆さまへの感謝

さて、晩年の父は、近所のフィットネスクラブでの水中ウォーキングに加えて、読書、クラシックカメラ、展覧会巡り、クラシックコンサートなど多くの趣味を楽しんでおりました。そして父の精神生活を何より豊かなものにならしめたのは、ここにご参列くださっている皆様との交流でした。大学を退職したのは1995年ですが、退職後も学会や研究会、プライベートな集まりに頻繁に出かけておりました。私は「いい加減にしないと『老害』と呼ばれますよ」としばしば忠告したのですが、一向に聞き入れる様子はなく、周囲の皆様のご厚意に甘えながら、83歳だった2008年8月にはロシアにさえ出かけました。フルシチョフの墓前で撮った写真が残っております。

父にとって幸運だったのは、退職した頃からパソコンとインターネットが家庭に普及しはじめたことで、海外の情報を入手したり、国内外の友人・知人とのコレスポンドスをするのが驚異的に容易になりました。父のコレポン好きはおそらく有名だったのではないかと思います。そうした交流によって、精神の活力を最後まで維持できたのだと思います。皆様、長年に渡りお付き合いくださいまして本当にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。また、今後も家族一同、何かとお世話になるかと存じますが、引き続きどうぞよろしく願いいたします。

2014年8月8日 告別式にて

(おおいし・あきこ

千葉大学法政経学部教授)

原発輸出問題について考慮すべき論点

参議院外交防衛委員会(2014/4/15)における陳述要旨

船橋 晴俊

1. 諸外国への原発輸出問題を考える際に必要な視点

(1) 海外諸国に原発を輸出する問題は、日本国内で原発を続けるかどうか、またその判断はどういう根拠に基づくものなのかといことと切り離せない。

(2) 日本の原子力政策は、その基本方針を定めている「原子力基本法」第二条において、「平和、安全、民主、自主、公開」の理念を提示している。原子力にかかわる政策判断は、これらの規範の原則に立脚しなければならない。

(3) これからのエネルギー政策は、福島原発事故の反省をふまえ、事故の歴史的意義を考えた上で、立案されるべきである。世界史のなかで、四大原子力惨害を列挙するとすれば、広島原爆、長崎原爆、チェルノブイリ原発事故、福島原発事故になるだろう。四大惨害のうち三つまでも日本で発生しているのは偶然ではない。このような惨害を引き起こした根拠を分析しなければならない。

2. 現時点での政府のエネルギー政策を総合的に評価する必要

(1) 4月11日に「エネルギー基本計画」(全78頁)が閣議決定されたことにより、「日本国内で原発を継続し、海外諸国にも原発を輸出する」という方針で明確にされた。

(2) 「エネルギー基本計画」の中に、「原発輸出」が位置づけられているので(同文書、48頁)、エネルギー基本計画の方針が妥当かどうかを検証する必要がある。

(3) 4月12日に市民シンクタンクである「原子力市民委員会」は『原発ゼロ社会への道—市民がつくる脱原子力政策大綱』(全238頁)を発表した。この政策大綱は、テーマの包括性、アプローチの学問的総合性(理工系、人文学系、社会科学系の専門知識に立脚)、作成方法における公論の反映という点で、前例の無いものである。

(4) これら二つの政策文書を比較し、どち

らが説得力をもつかを検討していただきたい。

3. 原発回帰、原発継続政策、その一環としての原発輸出政策の難点

(1) 原発には安全性が欠如している

a. 過酷事故が発生した場合、破滅的な被害、国の存亡にかかわる被害を発生させてしまう。福島第1原発事故の経済的被害は、すでに13兆円を超える。

b. 技術的対策を追加しても、過酷事故リスクをゼロにすることはできない。

c. 「新規制基準」は安全が確保される基準とは言い難く、「世界最高水準」には程遠い(『脱原子力政策大綱』4章7節、160頁、以下の引用はいずれも同文書)。

d. 過酷事故対策については、欧州加圧水型原子炉(EPR)に比べても、「新規制基準」は四点で劣っている(4章7節、163頁)。

e. 原発輸出に関して、日本側の安全確認体制が構築されていない。日本が輸出した原発で過酷事故が発生したらどうするのか。

(2) 各種の放射性廃棄物問題が解決されていない。

a. 高レベル放射性廃棄物については、少なくとも10万年間の安全を確保すべきであるが、その方法は見つかっていない(3章)。

b. 危険性の押し付け合いで、地域間、世代間の不公平をもたらす。紛争の種となる。

c. 日本学術会議は「回答 高レベル放射性廃棄物処分について」(2012年9月)において、「総量管理、暫定保管、多段階の意思決定」を提案したが、最終解決ではない。日本が輸出した原発の放射性廃棄物を日本が引き取るのであれば、諸外国に「超長期の危険性」と「解決できない難問」を押しつけることになる。

d. 原発には経済的合理性が欠如。平常時における発電コストが、設備投資コストも含めれば火力発電などに対して劣っている。事故がおればさらに悪化する(序章、12頁)。

4. 原発回帰と原発輸出の手続き面の難点

(1) 原発回帰を主張するエネルギー基本計画は民主的な手続きを無視している。

a. 国民世論は脱原発を望んでいる。福島原発震災以後、各種世論調査では「原発をやめるべき」が一貫して多数意見(終章、214頁、表6.2)。

b. 政権与党の公約違反。2012年12月の衆院選挙で、自民党は「原発依存度の低下」、公明党は「脱原発」を掲げたことと矛盾。

(2) パブリックコメントを無視している。

約19000通のパブリックコメントの意見分布を示すべきである。それを隠しているのは、「パブコメの多数意見が原発回帰に反対であるから」だとして考えられない。

(3) 原発輸出の方針は民主的な手続きを無視している。

a. 原発輸出は日本国内の民意に反する。時事通信の世論調査(2013年6月)では、政府が海外への原発輸出を推進していることについて「支持しない」は58.3%、「支持する」は24.0%で、反対は支持の2倍を超える。

b. 原発輸出は輸出先の民意を無視している。例えば、トルコでは原発建設反対が世論の多数。IPSOS社の「福島原発事故に対する世界市民の反応調査」(2011年4月)によると、80%のトルコ国民が原子力反対を表明。

c. 原発輸出に関係する調査活動において、「公開」の原則を否定している。トルコ、ベトナムの原発事業化調査を、日本原電が総額39億6900万円で受注しているが、公開された報告書は黒塗りだらけで、適正かつ必要な調査がなされているのか疑問が寄せられている(毎日新聞、2014.4.6)。

まとめ

1. 福島原発事故にもかかわらず、原発回帰と原発輸出を推進しようとする経産省主導

の政府の政策は、民意とかけ離れている。
2. 原発輸出政策は、過酷事故の可能性、高レベル放射性廃棄物という点だけからみても、諸外国の国民に危険負担を押しつけるものであり、日本と当該諸国民の真の友好関係と利益を損ない、将来、それらの負担

をめぐる紛争の恐れを伴う。
3. 原発輸出は、社会的利益を犠牲にしなから、特定の「業界利益」の追求に政府が便宜をはかっているという性格が強い。
4. 日本および諸外国の経済的發展やエネルギー問題の解決のためには、省エネルギー

ー投資や、再生可能エネルギーの投資を優先するべきである。
(ふなばし・はるとし 法政大学社会学部教授/同サステナビリティ研究所副所長/原子力市民委員会座長/日本学術会議連携会員)

懐かしの善通寺

Cseresnyesi Anna

日本からハンガリーに引っ越して早6年。あっという間に時間がたちました。私は生まれも育ちも日本です。父は日本の大学で働いて27年。私が生まれた町は、田舎のまた田舎。香川県の善通寺というところ。うどんと空海さんで有名な街です。大きな町と違って外国人はほとんどいなく、いてもみんなお互いに知り合いであるというぐらゐ小さな町です。

私はハンガリー人ですが、日本語はハンガリー語よりも先に話し始めました。私がまだ幼稚園に通い始める前、まだ赤ちゃん一人で遊んでいた時、重たい物を持ち上げる時いつも「よいしょ…よいしょ。」と言っていたので両親はどこで聞いたのかとびっくりしたそうです。

幼稚園も小学校も中学校も日本人と一緒に通いました。はじめは聖母幼稚園に通い、そのあと市立の小学校、中学校に通いました。

幼稚園の頃の私は自分が外国人であることを受け入れられなかったようです。幼稚園で自分の顔を書く時、金髪、青い目を描かずに、黒髪、黒目で自分を描きました。もちろん鏡を見れば自分はほかのみんなとは違うことはわかったはずなのですが…今思い返したらおかしいです。

小学校の頃は、自分はみんなとは全然違うということを気にせずに生活を送っていましたが、大きくなるにつれて、それが気になるようになりました。考え方や習慣は同級生と全く同じだったので、自分の外見が気になり始めました。自分が金髪で背が高く目が青いことに対し、コンプレックスを持つようになりました。そして、中学校2年生の時に、ハンガリーに引っ越して勉強すると決意しました。ハンガリー語は家で両親としか話していなかったので、ハンガリーに引っ越してからは勉強に追いつくのがすごく大変でした。

ハンガリーの学校に通い始めて一番びっくりしたことは、学校の掃除が無いことでした。私は結構几帳面なので(O型はおおざっぱ

らしいのに)掃除が無いことをすごく不思議に思いました。ハンガリーの学校では日本の学校のように生徒一同で学校をきれいにするのはなく、掃除をしてくれるお婆さんがいます。このためハンガリーではポイ捨てをする人が多いと思います。日本では自分で掃除をしないとイケないので教室は汚さないように気をつけますが、ハンガリーでは誰かほかの人がしてくれるだろうと考える生徒が多いです。

また、日本の学校は校則がすごく厳しいのに対し、ハンガリーでは何をしても怒られなかったので、「まだ怒られない…まだ怒られない」といつも驚きました。勉強の仕方もすごく違い、慣れるのに何年もかかりました。試験やテストに関しては、ハンガリーでは口頭試験が多く、今でも自分が言いたいことをハンガリー語でちゃんとした言葉で伝えるのは苦手です。日本では、部活などのため夕方遅くまで学校にいますが、ハンガリーの中学校、高校は遅くても4時頃終わります。中学生だった頃、夜遅くまで塾で勉強していたことを今思い返すと信じられません。

また、運動会や学校の行事は日本ではいつも熱心に練習しますが、ハンガリーではほとんどしません。本番一発です。ハンガリーでは、運動会はいつも一発勝負です。

よく、ハンガリーの友達に日本の何が一番恋しいかと聞かれます。いろいろあるけれど、たぶん一番恋しいのは和食です。いつも家で和食を食べていたので、ハンガリーの食べ物はそんなに好きではありません。でもこの問題はいつも私の父が日本から帰ってくる時や、広島の友達ただすさん(74歳)が解決してくれます!日本から尚樹せんべいや炒り子、スルメを送ってもらったときはすごく幸せです。

ハンガリーに引っ越してからは、一度だけ日本に帰りました。自分が生まれ育った町がゴースタウンになっていたのがびっくりしました。今はエルテの日本学科に通っています。副専攻は美術です。

ハンガリーに住んでから、日本の良い点、悪い点がわかり、ハンガリーでは通常考えられないことが遠くにいるからこそもっとよく見えてきました。14年間の日本の生活で身につけたものを生かして今後の生活に役立てたいです。

(チェレシネーシ・アンナ)



キッチンのお姫様になるまで

Tóth Timea

私は日本語を勉強しはじめて以来、教科書を開くたび、いつも食べ物の絵を眺めていた。「食べてみたい」という気持ちがどんどん強くなり、インターネットで和食レシピを探した。しかし、材料を簡単に買うことができなかったので、悩んでいた。ある日、私の日本語の先生に和食に関する興味について話した。それを聞いた先生がいきなりこう言った。「日本料理の作り方を教えてあげるから、うちで一緒に作ろう」。その約束は、私が和食のキッチンのお姫様になる旅への第一歩だった。

初めて先生のお宅に歩いていくとき、とても緊張していた。先生の前で失敗するのが怖かった。しかし、先生がドアを開けた瞬間にすべての悩みが吹き飛んだ。先生の台所は結構狭かったので、私は座ったままで先生が教えることを聞いた。最初にお好み焼きを作るようになった。レシピが簡単だったので、私もやってみた。正直、私が作ったお好み焼きは決して美味しくするには見えなかったが、味はうまくできた。先生の子供たちにそのお好み焼きを食べさせてみたら、ほめられた。そのおかげで、もっとやる気になり、先生から幾つもレシピをお願いした。

だが、その一ヶ月後、先生が日本に帰ってしまった。もう先生と一緒に料理をすることができなくなったが、あきらめなかった。うちでたくさんの和食についてのビデオを見ながら、簡単に作れるものに挑戦してみた。その一つは卵焼きだった。学校で友達に食べてほしかったので、朝早起きしたが、眠くてあまり集中することができなかった。フライパンを持っている間に熱い感触がして、見たら、なべつかみが燃えていた。慌てて水道のところに走り、やっと思いで火を消した。幸いにも怪我はしなかったが、その間に卵焼きが焦げてしまった。しかし、この事件でも私が和食の作り方をマスターするという決心は崩れなかった。もちろん、その後で作った卵焼きはうまくできた。毎週新しいレシピを試し、父親と二人で住んでいたのも、すべてを父に食べさせた。父はハンガリー料理以外はあまり食べがらない人だが、私の料理はかならず食べてくれた。彼に鶏の唐揚げを食べさせると、彼はこう言った。「このままだと、私の娘はキッチンのお姫様になるかも知れないな」。

キッチンのお姫様はちょっと子供らしい名前だが、なんとなく気

に入った。キッチンのお姫様になれるまで、がんばることに決めた。2012年の夏の間にいろいろなおかずを作れるようになった。その秋、彼氏もできたので、彼に弁当を作りたいと思った。漫画やアニメで、キャラ弁という、くまや猫をかたどったかわいい弁当を見て、彼の大好きなバットマンの弁当を作ってみた。中にはおにぎりや、ほうれん草が入った卵焼きや、とんかつなどを入れた。とんかつの上に、チーズを切って作ったバットマンを乗せた。彼に弁当をあげた時の顔は一生忘れない。幸せそうに食べている彼の顔を



眺めていて、気づいた。美味しい食事が人をにっこりさせる。自分が作った料理で人を幸せにしたいという気持ちが生まれた。その後、ほかの友達にも弁当を作り始めた。こうして日本料理を友達に紹介して、一緒に楽しい時間を過ごしたりした。

クリスマスの夜、姉がクリスマスプレゼントとして、レシピブックをくれた。中身は空っぽで、赤いペンで「キッチンのお姫様のもの」と書いてあった。

最高のプレゼントだった。それまでにやってみたレシピすべてをそのブックに書き、レシピによっては写真も載せた。そのころはもっと難しそうなおかずも作れるようになっていた。焼き餃子、エビフライ、肉まん、抹茶ロールケーキなども作ることができた。

あまり作らないものは、豆腐の入っている料理だ。最初のころ、なんとなく豆腐が入っている料理を作るのが怖かった。そのころはまだ豆腐を食べたことがなかったので、味や感触もよくわからなかったからだ。インターネットでよく見ていた和食のビデオの中に、冷たい豆腐のレシピがあった。ために、豆腐を買い、うちで作ってみた。結構美味しく見えたので、家に帰ってきた父にすぐ食べさせた。しかし、父は豆腐をプリンと間違えていたので、驚いた。甘くないと文句を言われて、豆腐だと説明したが、結局食べたがらなかった。私も食べてみたが、豆腐は好物の一つにはならなかった。

現在レシピブックの中に50ぐらいの和食のレシピが入っている。周りの人たちに和食を紹介するのが趣味になり、毎週誰かにお弁当や甘いものを作っている。料理を見て、はじめは怖がっている友達の顔が、どんどん幸せそうな顔になるのを見るのがすごく楽しい。失敗するときもあるが、うまくできる時が増えてきている。料理が下手な友達が、私に刺激を受けて、私に弁当を作ってくれたこともあった。ほかの人のために料理するのは本当に楽しいことである。私は料理を通して人を笑顔にしたい。しかし、キッチンのお姫様になるまでは、まだまだ長い旅になりそうだ。

(トート・ティーメア)

留学生自己紹介

本当の自分を見つける旅

リスト音楽院ピアノ科大学院2年

須田 瑞穂

ハンガリーに留学して早3年目となりました。僕とハンガリーという国が繋がったのは大学4年の夏に「ぎふリストマスターコース」を受講したのがきっかけでした。僕は岐阜市出身なのでこの講習会は高校の時から度々聴講に行っていて、地元の恩師の薦めで受けてみようと思って受講をしたのでした。僕はリストという作曲家に苦手意識を持っていました。それはリストのいい演奏を聴いていなかったというのも要因のひとつと考えられます。講習会前に教授が演奏をするコンサートがありました。そこで、僕はファルヴァイ教授の演奏するリスト作曲のスペイン狂詩曲を聴きました。僕は衝撃を受けました。こんなにこの曲は幅広く色鮮やかで美しい音楽だったのかと。まさに自分の思い描いていたリストの音楽でした。こんなに凄い教授のレッスンを受けさせていただくのだという感動と焦りで、翌日の講習会に向けて演奏会の前半で急いで練習をしに



帰宅したのを覚えています。受講した教授のレッスンは素晴らしく、留学するのならこの先生につきたいと考えたのでした。

そうして秋になって、卒業後就職をするのかどうするのかとすごく悩みました。真剣に考えた結果、ここで終わりたいという気持ちが強くなり留学する道を選びました。ハンガリーには本当に純粋にファルヴァイ教授のもとで勉強したいという気持ちだけでやってきてしまいましたので、国についてすら何もわからない、英語も半年間で詰め込むというあまりに無謀なスタートだったと思います。ただ「本気で学ぶ事ができるラストチャンスなのだ」という強い思いを持

っていました。僕は1年間パートタイムチューデントとして日本でいう別科、科目別履修生のようなコースに在籍し、2年目はマスターに進学しました。マスターは週2回のレッスンに加えて現代音楽のレッスン、室内楽のレッスンの計4回のレッスンと英語で行われる音楽理論や音楽史などの授業が加わりました。全て英語で受講できることはと



てもありがたかったのですが、とても慌ただしかったです。そんな中でもハンガリーではコンサート、特にオーケストラを無料か250円程で聴く事ができるので、とても幸せでとても濃密な日々を送っていたと思います。

僕はファルヴァイ教授と、ヤーンドー教授に師事させていただいています。両先生のレッスンはそれぞれ異なる視点からアドバイスをいただけるのでとても勉強になります。両先生に共通している事は、「自身で考えて作り上げたものに対してアドバイスをいただく」という点です。チャレンジしてみなければ自分の行きたい場所には辿り着けないのです。そこで、僕は日本では自分がいか

に受身の姿勢で勉強していたかを思い知らされたのでした。教授にはいつも「もっと楽しんで！音楽をもっともっと味わうのだ」と言われました。理想とする音楽があって、そこに辿り着く為に考えて磨いていくものがテクニックであるはずなのに、いつのまにか僕は転ぶことを怖れて理屈だけで音楽をしようとしていたのです。自分の潜在意識

を変えるという事は容易な事ではなく、漠然と何かが違うとは思っていたのですが、ハンガリーにいる間ひとりですごく悩みました。その理由に辿りつくまでには随分時間がかかりました。

つい先日の夏の事です。日本でソロコンサートをさせていただきました。自分だけしか演奏しない演奏会というのが初めてでしたので、正直本番を迎えるまで不安でいっぱいでした。舞台袖で200人以上のほぼ満席の座席を見て不思議な気分になり、そしていざステージに立ってピアノを弾くと最初はもちろん緊張していましたが、段々自分が開けていくような感覚になっていき、これが教授のいつもおっしゃっていた「音楽を味わう」、「楽しむ」って事なん

だという事に気がつきました。他にも幸いな事に次に繋がるようなコンサートに多数出演させていただき、この夏は本当に自分にとって転換期にもなりうる素晴らしい経験を積ませていただけたと思います。もちろんまだまだ未熟ではありますが、やっとならに立てたような気がします。

今年は留学最後の年です。開いた自分で新しい事を積極的に取り込む姿勢で自分を信じて来年春のディプロマコンサートはもちろんのこと、ヨーロッパにいるからこその事をしっかり学び吸収していきたいです。

(すだ・みずほ)

留学生自己紹介

ハンドボールと多くの出会いに感謝

ハンガリー体育大学研究生

中原 麻衣子

私は、筑波大学大学院人間総合科学研究科体育学専攻を卒業後、県立高校の講師として1年間働きました。現在は講師をやめて、4月からここハンガリーの地でハンドボールのコーチング留学をしています。

コーチング留学って？と思われる方が多いと思いますが、コーチング留学の方法にもたくさんあります。例えば、大学在学中に提携している大学へ交換留学生として留学する、各競技団体や協会などに所属している人が海外に派遣される、個人で勉強のために海外に行く、など

です。私の場合は、現在、学生でも有職者でもありませんので、完全に個人で留学をしています。個人といっても、日本で留学に向けてのお手伝いをして下さった大学院の先生、ハンガリーで受け入れて下さった指導者の方の温かい支援があって、こうして留学することができています。人との出会いには、本当に感謝しています。

現在、ブダペストにある中学生～高校生年代の選抜チームの練習に毎日帯同させてもらいながら、ハンガリー体育大学のハンドボール実技の授業を見学するという日々を送っています。

なぜ留学しようと思ったかという、「本場ヨーロッパのハンドボールがしてみた

い」ということと、「新たな夢に進むきっかけにしたい」という思いがあったからです。

なぜハンガリーにしたかという、受け入れて下さる指導者の方がいたということと、ハンドボール世界ランキング5位(日本は現在21位です)のハンガリーのハンドボールが見てみたかったということが理由です。ドナウの四季2014年(新春号No.21)で



紹介された井上くんは、ハンドボールコーチング留学の先輩です。彼も話題にしていますが、日本のハンドボールはまだマイナー競技ですし、オリンピックに関しては、1988年のソウル大会以来出場できていません。2020年東京オリンピックが決まったことは、日本のスポーツ界、子どもたちにとっても、大きな希望になったと思います。ハンドボールを愛する1人としては、ハンドボールの試合がテレビで紹介され、多くの方に知っていただく機会になればいいなと思っています。そして、オリンピック後もハンドボールが発展して行くように、現場でコツコツと頑張っていきたいなと思っています。教育現場にでたときに、子どもたちに正しい方法で、正しい指導をすることができ

るように。この想いを忘れることなく、残りのハンガリー生活も様々なことを見て、聞いて、体験しながら、学んでいきたいと思っています。

そして、トレーニングだけでなく、文化や考え方など、日本にいてだけでは分からなかった日本の良さ、日本にも取り入れたい海外の良さを感じていきたいと思っています。

ハンガリーハンドボール1部リーグには、現在3名の日本ハンドボール選手(男性1名、女性2名)が活躍しているらしいです。本拠地はブダペストではないですが、日本人選手も頑張っているということで、少しでもハンドボールにも興味を持っていただけたら嬉しいです。

4月からの始まったハンガリー生活は、さまざまな縁があって、音楽の方々や他のスポーツの方々にお会いすることができました。そして、様々な面で助けをもらいながら生活することができています。

しかし、挨拶と数字くらいしか分からないハンガリー語、まだまだ思ったことをスムーズに伝えることができない私の英語力。言葉の問題がたくさんあるので、まずは英語の勉強から取り組んでいる今日この頃です。

ハンガリーでの素敵な出会い、そして日本から応援してくれている家族・仲間感謝しながら、今の私にできることを精一杯頑張っていきたいと思っています。

(なかはら・まいこ)

編集部よりのお知らせ

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。<http://www.danube4seasons.com> 皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。





幼児サークルの紹介

ポジョニ 美奈

私が幼児サークルに参加し始めてかれこれ4年ほど経ちますが、色々な形式や先生方を経て今のようになってから8年程になります。子供の数が多かった時は3人の先生方に教えて頂いた時期もあったそうですが、ここ数年は1人の先生に2クラス看てもらっています。

幼児サークルは毎月2回土曜日に行っています(先生の都合や補習校の行事を考慮して、日程を決定しその都度参加者にメールで連絡。)まず9時15分から年長クラス(5-6歳児)が始まり、10時から10時15分までの休憩時間のあと、11時まで今度は年少クラス(3-4歳児)へと続きます。

先生が毎回その日のテーマをしっかり決めてきて下さって、年少、年長クラスそれぞれのレベルにあった課題を子供達に与えています。クラスではもちろん日本の行事にちなんだもの(例、子供の日の鯉のぼりや七夕の日のお飾り等)に触れられる機会もたくさんあります。

ざっとクラスの流れを紹介すると、まず読み聞かせから始まります。先生との会話を楽しみつつ、クラスの雰囲気も温まってきたところで、その日の課題(主に工作)にとりかかります。45分という限られた時間の中、それぞれ個性、日本語能力がバラバラな子供達を一つの課題に取り組みせまとめる事は決して簡単ではないと思いますが、明日香先生の力量で、日本語で遊ぶことの楽しさを子供達は感じてくれているようです。クラスが終わって、教室から出てくる子供達が自分の作った作品をいつも自慢げな顔で私達母親に見せに走ってくる姿がとても愛おしいです。

(ぼじょに・みな)



保護者から見た子どもの変化

丹野 かおり

幼児サークルに参加している子どもたちも、初回から保護者が傍にいないでもすぐ活動に興味を持ち楽しんでいる子や、保護者に見守られることで安心して取り組んでいる子など様々です。

現在、年少クラスにいる我が長男などは母が場を離れると泣き出し追いかけてきていましたが、先生の声掛けで徐々に活動に目が向き、母がいないことを時折思い出しつつも一人で参加出来るようになり、そして今では不安なく課題に取り組めるようになりました。父母に甘えたい場面が多い長男が、このように集団の場で自立出来るようになってきたのは、先生の配慮はもちろん、一緒に参加している子どもたちの存在があるからこそだと思います。

幼児サークルには補習校に通っている長女からお世話になっていますが、このサークルに参加している子どもの様子を見ることで、子どもの集団内での日本語理解力や工作や歌への取り組み方などが分り、家庭でのコミュニケーションの幅が広がりました。

言語面の確立がまだまだされていない幼年期であることはもちろん、現地の園に通っていること、また父親がハンガリー人ということもあり、平日に子どもが日本語に触れる時間は私が母語で話しかける送迎時と夕方から就寝までの数時間のみで、子どもの日本語習得に漠然的な不安を感じることもあります。しかし、このような小さな日本語枠も、幼児サークルのように母親以外の方やお友だちと楽しみながら自然に日本語に親しんでいくことで、広がってきたのではと感じる昨今です。

(たんの・かおり)

日本人学校

今回の運動会は、雨でした。日本人学校になってから十周年で初めての雨でした。体育館で行う運動会はとても不思議な感覚がしました。徒競走など、できない競技ができて悲しそうな顔をしている小学生、中学生が何人かいました。せっかくの運動会なのにと、私も少し残念な気持ちになりました。しかし、競技がすすむにつれて、みんなの表情が明るくなっていくのを感じました。とても楽しそうに運動会の練習をしたかがあったなと思いました。今年の運動会は昨年の運動会より一週間ほど早かったため毎日、組体操や全体練習(学校全体で行う練習、入退場の並び方や綱引きなどの練習)、応援合戦の練習をしました。

全体練習は先生方が授業をすすめてくださいました。全体練習では、中学生は小学生が整列する時に手助けをしました。並ばせていく

運動会で得たこと

うちに、小学生のみんなは自分達で素早く並ぶことができるようになりました。中学生の仕事が少なくなって、私たち中学生が小学生の成長に役立って良かったなと思いました。組体操は高学年(5年生以上)だったので、自分の演技をより良くすることに集中することができました。しかし、応援合戦は全体練習や組体操のようにはいきません。一学期の終わり頃から、私たち中学生が低学年もできるような振り付け、覚えやすい動きを考えました。

そこから、みんなにわかりやすい説明を考えたり、実際に教えたりしました。低学年は、褒めることによってやる気を出してくれるのかも考えました。私は、わかりやすく教えることや褒めることがとても苦手なので、とても苦労しました。

中学部3年 山岸 春陽

はじめのうちは、小学生のみんなも、中学生のみんなも、なかなか言うことをきいてくれませんでした。小学生には、怒らずに耐えることができましたが、中学生のみんながやることをやってこなかった時があったので、その時に何回か怒りました。叱ることに慣れてないなかで、怒らなければならなかったのもとても疲れました。親が私を叱るときに苦勞がわかった気がします。朝から怒ると怒る人も怒られる人も一日が始まる時から嫌な気分になります。

私も実際そうでした。朝から叱ることを考えるだけのために息がでました。中学生には怒ってばかりでした。褒めることもしてあげればよかったと今では思います。運動会で得た、リーダーとしてみんなをまとめる力や反省したことをこれからは活かしていきたいです。

(やまぎし・はるひ)



団長として

中学部3年 野村 直希

私は今回白組の応援団長をさせていただきました。人前に立ち、リーダーとしてみんなを引っ張っていくのは初めてでした。日本人学校の運動会をまだ、経験した事がなかったので同じ組の人や先生に教えてもらい何とか応援の内容を理解することができました。応援の振り付けや言葉はみんなと悩み、昨年の応援を参考にしたりして何とか決めることが出来ました。しかし、団長の仕事はそれだけではありません。他にも選手宣誓のセリフを覚えたり、低学年を引っ張ったり、チームのために仕事をたくさんしました。やはり、一番の仕事は応援合戦でした。応援の練習をすると恥ずかしくて声をあまり出してくれず先生から、「もっと大きな声が出る」と言われました。さらに練習後の反省会の時にも注意すべきところがたくさんあって大変でしたが、声をかけるとみんな気持ちを切り替えてくれて精一杯、応援の練習をしてくれました。みんながしっかりと覚えてくれたので私は余裕を持って運動会に挑めました。しかし、運動会はそれだけではありません。他にも、綱引き、玉入れ、リレー、組体操、運命のカラーボール、まだまだたくさんあります。これらの競技も練習しました。綱引きの掛け声は何にするのか、バトンをどうやって渡すのか、沢山勝つためにみんなで覚えられました。

そして、運動会当日、あいにくの雨でした。そのため、体育館で運動会が行われました。練習した成果がでていたのか、一人一人が素早く動いていたので、スムーズに進んでいきました。しかし、問題は競技の勝敗です。白組は、綱引き、玉入れ、大玉送り、運命のカラーボールで負けました。そのとき雨もやみ地面も乾いて来たので、予定では中止だったリレーが出来るようになりました。だから私たちはリレー

だけは勝とうと、一生懸命走りました。一組は四位でしたが、もう一方の白チームは補習校に続いて二位だったので良かったです。結果は準優勝でしたが悔いのない運動会となりました。

私は今回の運動会で色々なことを学びました。皆をまとめる難しさ、一から考えて作ることの大切さ、協力することの大切さを学びました。これからリーダーとして行動することがたくさんあると思います。団長になって学んだことをバネにしてこれからも頑張っていきたいです。まだまだ足りない部分があると思うので、たくさんの経験を通してして足りないところを埋めていけたらいいなと思います。皆に協力してもらいながら一生懸命、仕事をして皆に認められるようなリーダーになりたいです。

(のむら・なおき)

最高のプレゼント

ー 2014年度4カ国対抗親善ゴルフ大会を終えて

畑山 建吾

2014年6月29日に第10回を迎えた4カ国ゴルフ対抗戦が行われた。私個人としては今年で4回目の参加になった。初回・第二回で崩れ去った名誉・自信を挽回すべく、昨年のオーストリアで行われた対抗戦では入念な練習を重ね参加したが、結果敢え無く撃沈。私のハンガリーでの4カ国対抗戦は本当に苦い思い出の繰り返しだ。昨年までの戦績を思い出すと本当に心が折れそうになる。そんな苦い体験が3年も続いたので個人的には不参加も考え、正直対抗戦への気持ちは盛り上がっていなかった。ただひょんな事から春から部長になってしまい、さすがに敵前逃亡はできない。またチーム全体も昨年に比べて今年はそれほど盛り上がってなかった。幹事内で対抗戦の準備が集まると、まあ無事に終わるといいなという感じだった。明らかに去年の絶対優勝を目指すというものから違っていた。

というも去年まで活躍していた前ゴルフ部長含め主力メンバーが今年の春に次から次へと帰国してしまっており、対抗戦ではいつも戦犯と呼ばれている私が部長を拝命するような状態。ゴルフ部のメンバーは頼りない部長と大幅な戦力ダウンを感じ戦意喪失ともいえる状態だったのではないだろうか。幸いにもそんな部の内情を知らないD社からは4名もの助



人参加をいただき、参加メンバーとしてはなんとか揃えることが出来た。

さらに、今年はハンガリーチームが幹事として自国で主催する大会ということで、オーストリア・スロバキア・チェコからはるばる参加やってくる各国メンバーに粗相の無いように企画・準備もしなければならず試合よりもそちらの方が心配だった。ゆえに練習にもいままひとつ集中できないような状態で大会がどんどん近づいていた。総勢70名の大会という事で、通常のコンペとはまた違い準備はとて大変なのだ。ただ他に2名いた幹事が優秀だったおかげで、何もしない私を横目に淡々と準備は進んでいた。

部長としてどうやってチームを率いて勝つか、強化方針はどうするのか。去年は前部長がきちんと方針を出していた。私はというとはっきりいって何にもできなかった。幹事業務や仕事が忙しくそれどころではなかった。ゴルフの調整をする暇も余裕も無くあれよという間に大会の行われる週末が来てしまった。また大会の2週間前にゴルフのマッチプレーで負けておりそれで意気消沈して、その後プレーにもなんだか気合がはいらず直前まで散々なスコアで、今年も駄目なのかという予感がしていた。

でも皆にはその時はっきりとは言えなかったが、この大会がハンガリーチームとして出場できるラストチャンスだと思っていたのでやっぱり勝ちたいとは思っていた。そして当日。あれこれ悩んでもくるものは来てしまったので、まずは練習ラウンドで調子を確認。やはり気合は入らないがショットの感触が良く、スコアは駄目ながら自分的には満足。前夜祭もやらないので、本戦に備えて早く寝た。今年はとて健康的だ。当日の朝、各国のメンバー達が集結したパノニアはなんだかいつものコースとは違うような賑やかさで、ちょっと緊張した。が自分のホームコースで大会が出来ることによってちょっと嬉しい様な誇らしいような気持ちになり気分が高揚して行くのを感じた。自分のスタート前にも

幹事として受付を手伝ったり、ルール説明をしたり、賞品の仕分けをしたりして、ゴルフに集中出来なかったのだが今思えば逆にこのおかげでスタート前に落ち着いたような気がする。運命のスタート。第一打はフェアウェーに置けた。そしてツーオン・スリーパットのボギー。2番ホールはパーと来て、まずまずの始まりだがいきなり3番で大きく躓いた。ショートホールなのに左に引っ掛けてロストボールで6打になった。後続の組にいたチームメイトが見て一言、「畑山さん、またやってしまいましたね」。

でも今年は落ち着いていた。これがホー

ムの利というものなのかもしれない。幹事の準備もちゃんとしたり、年に何十回と回っているパノニアなのだからスコアが悪いわけがないという気がしていた。そして淡々と18ホールが終わり、終わってみたら4度目の正直で80台が出せた。この時の気持ちはなんというか、4年間たっていたストレスがずっと消えたというか、なんともいえないものであった。この瞬間は、「これで別に優勝しなくてもいいや」とさえ思っていた。

そして結果発表。パソコンにデータを入れて自動計算なので、幹事も含め誰も結果を知らされてない中、各チームの期待がひしひしと感ぜられる雰囲気。急に自己満足から気持ちが変わっていき、やっぱり優勝したい!

各国上位9名のグロススコアが開けられて行く。一番少ない国が優勝だ。1番、2番、3番あたりまでは拮抗。ここに自分の名前がある事も本当に嬉しかった。どんどん名前・スコアが開けられていくが、ハンガリーだけ三桁が出てこない!今年は圧勝だ。にわかには信じられなかった。皆笑って嬉しそうだ。去年とは全然違う、天と地の差だ。その夜の酒はいつものビールなのにやっぱり美酒だった。個人戦でも2位というおまけも嬉しかった。

ハンガリー参加メンバーの皆様、本当に優勝できて良かったですね。奮闘ありがとうございました。またハンガリー皆様のご声援(?)ありがとうございました。今年で終わらず連覇と行きましょう!

4回の対抗戦を通して本当に貴重な経験をさせていただきました。自分としてはゴルフへの取り組み方が変わる大きな経験でした。ゴルフは個人のスポーツだと思いますが、団体戦もまた面白いです。

残念ながら8月にハンガリーから異動が決まり、ゴルフ部には三年半の在籍期間となりました。最後の対抗戦に最高の結果が出て、忘れることができない思い出となりました。ハンガリーゴルフ部の皆様、これまで一緒にプレーしていただきありがとうございました。欧州内の異動なのでこれからチャンスがあれば参加させていただきたいと思っていますので、その時はよろしく願います。

(はたやま・けんご ソニー・ハンガリー)

2014年4カ国対抗親善ゴルフ大会

町野 憲善



本年は対抗戦が始まって10年、10回目を数える記念大会を、ここハンガリーのホームコースで開催できることは、単なる、持ち回りのタイミングだけでなく何か剛運を感じる。事の始まりは、2005年、JETRO事務所(オーストリアと記憶)が発起人となり、中・東欧4カ国、オーストリア(A)、チェコ(CZ)、スロヴァキア(SK)、ハンガリー(H)のゴルフの戦いが始まった。大会は年に1回、会場は持ち回りのルールに従って開催される。大会名に「親善」とあるが、最近はそのスコアへのこだわりが強く、ここ数年、大会前に、各国が秘密裏に複数回にわたる下見プレーを行うことからそれが伺える。

我がチームの9回までの成績は決して満足できるものではなく、「来年こそは」を繰り返しつつ、10回目を迎えてしまった。過去の成績は9戦中2勝、勝率22%であった。

今年はハンガリーチーム内に、過去に記憶がないほどのショックが走った。ベストグロスをもぎとっている80打代の真の実力者4名が、次々と帰任したのである。また、90打代前半に手堅くまとめる、巧者も複数名帰任した。どこのチームも駐在員を主要構成メンバーとするので条件は同じともいえるが、ハンガリーチームにとっては、実力者のほとんどが抜けるという重大な出来事であった。

団体戦のルールはグロススコアの上位8あるいは9名の合計スコアを争うことから、ハンガリーチームへの負のインパクトは強烈であった。昨年と比較して、上位6名が入り替わることになる。新入部員は加入したが、コースに慣れていず、スコアのバラツキが多く不安があった。

「ホームでの大会」、「10回目の記念大会」、「来年こそは」と言い続け、オオカミ少年状態化していた。ハンガリーが優勝しなければならぬ状況だったが、新部長は涼しい顔をして、プレッシャーを楽しむだけの余裕を見

せていた。

だが、悪いことは続くものだ。春のマッチプレーの準々決勝の試合で、実力派の某店主に1UPの僅差で敗退してしまったのである。勝負は最終ホールで決着した。負け方が悪かった。そのショックが主要メンバー帰国に加え、二重苦として新部長に乗りかかった。大会が近づいて、練習ラウンドを行っても、どうも選手同志がじっくりしない。本来、チームのベクトル合わせに活躍をするはずの部長が、自分の調子合わせで、他人事どころではないのである。

そのようなチーム状態で 6月29日(日)の本番を迎えてしまった。今回の参加選手数は70名と大繁盛である。困ったのはハンガリーの大会幹事である。70名をどうさばるか。大会は日曜日のため、終了後、各国チームは月曜日に向けて帰国する。そうすると、遅くとも4時前には表彰式を終了させたい。そこで、10回目の大会は初めて、OUT、INそれぞれ9組が同時スタートすることにした。会場のパノニアゴルフ場の全面的な協力を頂いた。

しかし、難問が発生した。過去から引き継いでいるスコア集計ソフトは、シンプルにOUTから順次スタート用として完成されたものである。これを同時スタート用に改造することが求められた。ソフトを作った人はお解り頂けると思うが、他人の作ったソフトを改造することは時間と根気の戦いである。「個人戦のダブルペリア」、「大波賞」、「小波賞」、「発表の演出」など単純ではない。某ロジ会社の若手が半分業務命令のもと精力を注ぎ込んだ。その結果、解説、改造に成功したが、実際に機能するかどうかは当日の成績発表時まで分からず、ぶつけ本番であった。

本番当日は7時の受け付け開始を待たずして、続々と各国チームのユニフォーム姿の選手が景品を抱えて、集合してきた。戦いは始まりつつある。

敵のチームは勇躍、集合しつつあり、わがチームは負けじと奮い立つ。天気晴朗で微風なり、グリーンの転がり早し。

試合を終えた選手が、順次それぞれの結果を抱き、本部に戻ってきた。チームメンバ

ーが帰還する都度、歓喜の叫びや悲痛な叫びが上がる。選手の顔が輝いている。結果発表である。改造した集計ソフトは愚図らないか心配。最終的に総勢67名の参加となった。まず、個人戦、ダブルペリア方式の発表。下位から順次10名ごとにまとめて、発表、更新される。下位にはハンガリーチームのメンバーはパラパラと散見されるだけ。マズマズの出足。中盤から上位にかけて、我がチーム名の露出度が高くなる。期待できる。ここまで改造ソフトは機嫌よく動いている。残り5名。嬉しい事に個人戦ベスト3に、我が新部長が準優勝で入り込んでいた。二重苦の中でプレッシャーを跳ね除け、準優勝とは立派、素直に拍手である。

次に団体戦の結果である。チームの真の実力がでる。この時点でソフトの改造者を含め、だれ1人として結果を知る人はいない。団体戦の発表は各チームの上位9名が順次横並びで、4名ずつ発表されるロジックになっている。まず、各国の1位が映る。さすがに4名とも80打代である。2位からばらけてきたが、まだハンガリーとSKは80打代。AとCZが90打代に変わった。3位は4チームともに90打代となった。4位はSKが3桁打へ、5位はAが3桁へ変わった。

ついに、勝負はハンガリーとCZの一騎打ちとなった。CZは2年連続優勝チーム。3年連続優勝が懸かっている。6位はまだH、CZともに90打代で拮抗している。この段階では優勝チームはパソコンの中。次に7位の発表へ。司会のドーンの合図でキーは叩かれた。スクリーンはCZチームの3桁打代を映した。Hはまだ90打代。この時点でハンガリーチームの優勝が決定した。

その後、8位、9位もハンガリーチームは90打代と圧勝だった。チェコチームは粘ったが、最終的に後半で力尽き3位。オーストリアチームは後半に挽回してシブトク2位。スロヴァキアは4位であった。優勝のハンガリーと準優勝のオーストリアチームとでは9名の合計ストローク数で25打の差があり、文句なしのダントツ優勝であった。

次回もチームバランスで行くぞ、ドーン。(まちの・のりよし ダイヤモンド電機)

多分、僕だ!

藤田 洋一

ハンガリー日本人ゴルフ部の畑山部長から、7年ぶりの4カ国対抗戦優勝を記念して、「ドナウの四季」へのエッセイ依頼が届いた。「ゴルフ部の輝かしい足跡として記録に残せる良い機会だと思いますので是非宜しくお願い致します」とあるが、今回の4カ国対抗戦は「成績上位者9名の合計」で争うルールで、小生はその9名に入っていない。「そんな小生が何を書くんだった?!」と正直思ったが、幹事としてご苦労された部長からの依頼なので、渋々筆を執った次第である。

6月29日(日)晴れ、Pannonia Golf & Country Club、ハンガリー・チームのホーム・コース。最終9番(Inスタートだった)を終え、同

組で回った3名のメンバーとがっちり握手、クラブハウスへと向かった。48+52=100、やっちゃった…。途中ですれ違うハンガリー・チームのメンバーに「すみませんでした!」と謝る。先発組が待つテーブルの所に行き、これまた「すみませんでした!」と謝る。すると、

何人ものチーム・メイトが同じように謝る。「やっぱり今年はダメか」と思った。いや、しかし、「ん?何で僕は謝ってるんだ?昨年のオーストリアでの大会では謝らなかつたぞ」。そ

う、ハンガリー・チームはこの1年で上級者が次々と帰国、実は今年は「9名に入らないといけない」と思っていた自分が居た。そして多分、少しだけかも知れないが、「藤田は入るだろう」と思っていた人も居た筈だ。「戦犯」と言う言葉が頭をよぎった。

小生は幹事の一人として、この日は司会を務めた。但し、事前準備には一切参加せず、当日限定のちょい役(ちなみに、閉会式の最後の締めで畑山部長が挨拶、その時に各人の苦労をねぎらい幹事一人ひとりを紹介して終わったが、小生は名前を呼んで貰えなかった…。さて、いよいよ団体戦の成績発表に! 今回の成績集計・発表ソフトはなかなか



かの優れものだった。各チームの第1位から順番に発表され、その時点での合計が発表される。第1位の段階ではオーストリアのメンバーが82でトップ、しかし第2位の時点で

何とか面目を保った

私にとって初めての参加となる4ヶ国対抗戦を前に、少なからずプレッシャーを感じていました。「過去の栄光?」から設定されたハンディキャップからすると、私はチームの中堅的な位置付けにあり、それなりのスコア(80台)を出さなければならぬプレッシャーと期待(?)を感じていました。ところが今年の調子は惨憺たるもので、3桁から脱出する事が中々出来ません。一番の原因はドライバーの曲がり。ロストボールになったり、池ポチャしたりで2打目がまともに打てません。これでは3桁からの脱出は出来ませんよね。

ドライバー改善の目処も立たないまま、開

ハンガリーは174で1位に浮上。第3位、第4位、…、第7位で町野さんが99で登場、ここまですべてハンガリー・チームはずっと1位をキープ。この時点で小生は優勝を確信。「あと2人だ、ひょっとしてえー!」。「同じ100の場合、年齢が上の方が先に出るんじゃないか?そしたら多分、僕だ!」。司会と言う任務を忘れて、一瞬の間にこんな事を思っていた。しかし、残りの2人も99だった。

本大会の前日の練習ラウンド、最終18番の長いPar 4でツー・オン、3mほどのバーディー・パットを決めれば45+44=89の自己新となるはずだったのが、強気のパットでボギーとなり91に。でもこの日のメンバーの中で、多分ベストスコアだった。

「明日もいける!」と思ったのに…。4カ国が終わると、1年後の4カ国対抗戦まで、また一から出直した。1週間後の週末ゴルフ(株式会社R和のT山さんが毎週予約してくれる誠に有難い集まり)に参加、42+48=90の自己ベスト・タイが出た。ゴルフはなかなか深くて厳しい。

(ふじた・ひろかず 伊藤忠ハンガリー)

橋本 恭行

しかし、気持ちと技術は全然別物、と言う分り切った事を痛感するのに、大した時間は必要ありませんでした。相変わらずドライバーは曲がり、パットも入りません。前半終わって何とジャスト50。「これはやばいっ。3桁行ったら完全にA級戦犯だ。1年間酒の肴にされる」。個人戦だったらこの時点で諦めていたと思いますが、今日は諦める訳には行きませんが、自分なりに精一杯我慢して、最終的には何とか2桁に収める事が出来ました。が、それでも自分の中ではB級戦犯だと思っていました。

そして結果発表の時がやって来ました。今年各チーム上位9名の合計スコアで競う

事になり、結果はなんと、ハンガリーチームが2位のオーストリアチームに25打差を付けて見事に優勝。私の予想では優勝は無理と思っていたので喜びは倍増でした。結果だけを見れば、ハンガリーチームだけが上位9人のスコアが全員2桁でした。我々のチームにスーパースターはいませんが、チームワークで勝ち取った勝利だと私は思っています。ゴルフに限らず、他のスポーツでも、もちろん仕事においてもチームワークが非常に大切だと言う事を再認識した大会でした。来年はスロバキアでの大会になりますが、ハンガリーチームとしては、チームワークに更なる磨きをかけ、2連覇を目指して頑張ります。私個人としましても、もっとチームに貢献出来る様頑張りますので、皆様の応援を宜しくお願い致します。

(はしもと・やすゆき

テイエス・テック・ハンガリー)



私のゴルフ道

高垣 信元

誉を得ました。

6月29日、試合日です。受付にいて、まぶつくり!写真の天使のような美女が2名、笑顔で出迎えてくれました。トーナメントに出場できて、「よかった〜」と感じた一瞬です。この美女たちのためにも、「がんばろう!」といそそと練習場に向かいました。練習場でのアイアン、続いてドライバー、当り・距離とも良好。頭の中に「絶対調」の三文字が浮かびました。

開会式、集合写真撮影と行事をこなし、いよいよゲーム開始。第3組目、私の出番。1番ホールドライバー、今日一日を占う大事な一打。何時もより時間を掛けてアドレス。気持ちテークバックを抑えめにして、スイング。「当たった〜」コース・距離とも十分。2打目、得意の8番アイアン。グリーンフラッグに向けて一振り、ここまではイメージ通り。しかし、結果は超ダフリ。空しくもボールは2メートル先に…。「あれ?こんなはずでは」と思えば思うほど、ショットが悪くなり、浮き沈みの激しいゴルフ。結果はグロス124。美女と団体戦の両プレッシャーに負ける形になり、今年になってのワーストに近いスコア。ゴルフは「メンタ

ル・スポーツ」と言われる理由が分かり、素人の私にはいい勉強になった一戦でした。

さて、結果発表。団体戦のルールは各チーム上位9名の合計スコアで順位を決定。もちろんハンガリーチームは17~18人エントリーしているので、私のスコアが9人の内に入ることはまずは無い。まず1人目発表。オーストリアが1位。次々と発表が進み、9人目の結果がスクリーンに表示される。「ハンガリー優勝!」狂喜・乱舞の一瞬です。

その夜、日本食材店「大吉」での祝賀会。「ビールかけ」は店内保全のため中止し、出場メンバー&サポーターの間で、「いかに自分が優勝に貢献した」等の自慢話や、「臥薪嘗胆の数年間」のうさ話、他国のチームの「マナーが悪い」だの、種々こもごもの話を酒の力を借りて、「優勝」の実感を噛みしめました。

50歳になって始めたゴルフですが、ゴルフそのものの面白さよりも、仲間内での「チャット」の方が楽しい私のゴルフ道です。今後も、愉快的先輩たちに混じって少しでもスコアを伸ばそうと思って練習に励んでいます。

(たかがき・のぶもと

東洋シート・ハンガリー)

スポーツ行事・運動サークル情報

ゴルフ部

<2014年度の活動、公式行事予定>

○月例会(何れもPANNONIA Golf Course)

- ① 3月23日(日) 優勝 榎橋(ブリストン)/2位 竹内(尚)(スギキ) /3位 川嶋(イビデン)
- ② 4月13日(日) 優勝 岡崎(ダイヤモンド)/2位 秋山 (マゼールスギキ)/3位 横平(リョウ)
- ③ 5月11日(日) 優勝 阿部(大気社)/2位 畑山 (ソニ-) /3位 柿崎(スギキ)
- ④ 6月8日(日) 優勝 大浦(スギキ)/2位 高垣 (東洋シート) /3位 今井(三菱電機)
- ⑤ 7月13日(日) 優勝 北折(竹中)/2位 辻 (日清) /3位 森(ユニ-)
- ⑥ 8月3日(日) 08:00~
- ⑦ 9月14日(日) 08:00~
- ⑧ 10月5日(日) 08:00~
- ⑨ 11月2日(日) 08:30~

○「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権

第20回(春季) 現在開催中
第21回(秋季) 8月上旬~10月下旬予定

○第8回PANNONIAワールドカップ:

欧州、アメリカ、韓国、日本選抜 春~夏頃予定

○第9回四カ国対抗戦:(PANNONIA Golf Course)

オーストリア、チェコ、スロバキア、ハンガリー対抗戦
6月29日開催
団体戦 : ハンガリーチーム優勝
個人戦 : 2位 畑山 (ソニ-) /ハンガリー、
5位 飯尾 (大吉) /ハンガリー

○第5回年代別対抗戦:

30歳から60歳までの各年齢層による対抗戦(夏~秋頃予定)

<部員募集>

ベテラン部員が帰国され、現在、部員数が減少気味です。
ビギナー、女性部員も大歓迎ですので、ゴルフにご興味のある方は下記連絡先までお気軽にお問い合わせ下さい。連絡先: ユーラシア・ロジスティクス 高松(yoshihiro.takamatsu@eurasia.hu)

テニス部

10月19日より日曜テニスの冬季シーズンが始まります。
冬季は暖房が完備されたテント内でテニスをしますので、雨や雪による中止も無く、寒いのが苦手という方でも楽しめます。初心者から経験者まで気軽に参加し、試合形式を中心に活動しています。

現在の部員数: 11名(男性8名、女性3名)

冬季期間: 10/19(日)~2015年4/12(日)

時間帯: 毎日曜日午前9時~11時

コート: ハード1面、クレー1面の計2面

場所: Városmajori tenisz club

クラブ詳細: <http://www.vtctenisz.hu/eng/index.php?page=rolunk.php>

本年度の実施予定活動: テニス以外の各種親睦会(随時)

幹事連絡先: 盛田恒平メールアドレス (kom.bp2@gmail.com)

midorino oka
緑の丘日本語補習学校

バザール

日時: 2014年11月29日(土)
13時~15時

手作り小物、雑貨、食器、電化製品
大人服、子供服、靴、和食
書籍、DVD

場所: ブダペスト2区 Törökvesz(トルクベース)小学校内
1025 Budapest Törökvesz út 67-69



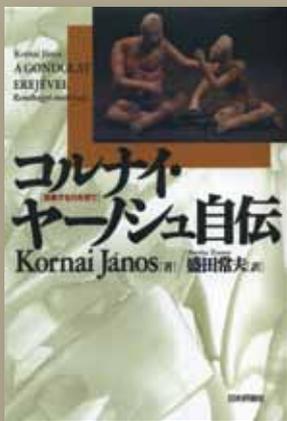
幼児サークル卒園式



4過酷ゴルフ対抗戦



ブダペスト日本人学校ふれあい大運動会



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円 (税込) ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0  日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学
部の定番テキスト。体制転換の理論と転
換直後の現状を分析。各大学で教科書と
して使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の
比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体
制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円 (税込) A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を
輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著

日本評論社

定価3800円

